

2010年度 花王・教員フェローシップ

Wildlife of Mongolian steppe

～モンゴルの大草原の野生生物～

墨田区立堤小学校 広沢 佑

3月 出会い

年度末の忙しさに追われる3月。職員室の数多くの回覧の1つとして、『花王・教員フェローシップ』の募集要項があった。僕はろくに目も通さず、ただチェックだけをして次の先生に回した。ひょっとしたら、これだけのことで終わっていたかもしれない。

数日後。この3月で定年を迎える先生が、その回覧を僕のところに持ってきた。僕の尊敬している先生である。「広沢さん、これ面白そうじゃない？」

Earth Watch の活動。花王の教員フェローシップという取り組み。そして、それに出会うことができた、小さな奇跡。2010 年夏、僕は夢のような体験をした。モンゴルでの感動は、帰国した今もまだ冷めない。このような素晴らしい出会いを用意してくれた全ての人々に、深く感謝し、敬意を表しながら、僕の体験を簡単にまとめてみたい。

プロジェクト概要

○期間 2010 年 8 月 1 日(日)～14 日(土) 【チーム 4】

○調査地 モンゴル ドルノゴビ・アイマグ イフ・ナルティーン・チュロー自然保護区

(Ikh Nartiin Chuluu Nature Reserve, Dornogobi Aimag, Mongolia) 【通称 Ikh Nart】

○主任研究者 Rich Reading (Denver Zoological Foundation)

○Earth Watch ボランティア 6 人 (USA 4 人 日本 2 人)

○調査の目的

このプロジェクトの当初の目的は、「アルガリ」の調査と保全である。アルガリとは、絶滅危惧種に指定されている、世界最大のオオツノヒツジである。調査から、アルガリの個体数が減っている原因は、密猟や、家畜の遊牧による生息域の減少であることがわかってきた。現在は、まだ明らかにされていないアルガリの死亡率、生息地利用、行動、繁殖などについて、さらなる調査を進めている。

プロジェクトが進むにつれて、Ikh Nart に生息するアルガリ以外の野生動物の情報も集められてきた。例えば、シベリアンアイベックス、クロハゲワシ、ハリネズミなどである。また餌となる、植物、昆虫、トカゲ、アレチネズミやハムスターなどの小型哺乳類についても、調査をしている。

現在の調査の中心は、「それぞれの動物がどのように生息域を分け合って、餌となる資源を分配しているか？」ということである。例えば、どのようにアルガリとアイベックスが共存し、家畜である羊や山羊による影響はどのようなものなのか、ということを探査している。この調査によって、Ikh Nart 全体(そして地球全体)の動物たちの生態系の保全に欠かせない必要条件を明らかにしていくことを、目的とする。



4月 クラス

4月。小論文を書いた。2010年度、僕は5年生の担任。昨年度からの持ち上がりである。約半数の子が外国にルーツを持つという、国際色豊かなクラス。だが、生活に困難を抱える児童も多い。なかなか学校に来ることができない子もいる。そんなうちのクラスの児童は、生き物、特に小動物が大好きである。苦しい現実。これからの人生で、家庭や学校、社会とどう折り合いを付けていくのか。そんな彼らにとって「生き物が好きである」という純粋で素直な気持ちは、世界と主体的に関わっていくための突破口となるかもしれない。

できることならば、クラスの全員でモンゴルに行きたい。でもそれが叶わないのなら、せめて僕だけが代表として参加して、その経験をクラスみんなに伝えたい。そんなことを考えて、応募した。

5月 通知

5月13日。運動会の練習が本格的に始まる頃、合格の通知が来た。5歳になる長男は、僕が夏に一人で出かけてしまうことが不満なようであった。11月2人目を出産予定の妻は、快く了承してくれた。家族への多少の後ろめたい気持ち。だがそれ以上に、これから待っている素晴らしい冒険に、僕の心はワクワクと膨らんだ。まるで少年の日に戻ったみたい。このような気持ちは、久しぶりであった。

6月～7月 準備

高鳴る胸とはうらはらに、日々の忙しさに追われて、準備はなかなか進まない。結局、ほとんどの準備は夏休みになってから出発までの一週間で行った。

- 持ち物 寝袋、スリーピングパッド、フリースなどを買い揃えたので、かなりの出費となった。
- 予防接種 以前、青年海外協力隊に参加したときに色々打ったので、今回は打たなかった。
- 体力 雨の日も風の日も、往復16kmの自転車通勤。2週間に一度のペースで登山をする。
- 英語 全く手がつかず。全てをジェスチャーで伝える覚悟を決める。

7月30日 出国

いよいよ待ちに待った出発。Air Chinaで成田→北京→ウランバートル。せっかくなので北京に2泊する。好物の麻婆豆腐を食べ過ぎて、下痢になる。

8月1日 ランデヴー

モンゴル、ウランバートルへ。すでに大地の広大さ、空気の爽やかさに感動する。

18:00 Zaya Hostelにてランデヴー。今回のEarth Watchのボランティアは6人。女性は、Brenda(USA)、Ellen(USA)、Jeanne(USA)、Yukiko(日本)の4人。男性は、Joseph(USA)と僕の2人であった。なぜか韓国料理のお店に行き、食事をしながらそれぞれ自己紹介をした。

8月2日 Ikh Nart へ

朝、今回のプロジェクトの調査地であるIkh Nartへ向けて出発した。Ikh Nartはウランバートルの南西約300kmにある自然保護区である。モンゴルは自然保護区を4つのカテゴリーに分類する。その中でIkh Nartはカテゴリー3の「特別な自然現象の保護を主目的として管理される地域」に分類される。

僕たちは電車で7時間ほど揺られてShivee Gobi駅に到着。さ



らに1時間ばかり車で走って、17:30頃 Ikh Nart のキャンプ地へとたどり着いた。

キャンプの生活

【メンバー】

キャンプでは25～30人がプロジェクトに携わっていた。出入りも頻繁にあり、一番多いときには35人いた。Earth Watch のボランティアが6人。アメリカの Denver Zoo のスタッフが4人。(Denver Zoo は、プロジェクトに強い影響力を持つスポンサーのようであった。)モンゴル人の研究者・学生・スタッフが15人程度。スコットランドとアメリカの大学院生が各1人ずつ。途中からアメリカの Anza-Borrego Desert State Park (Ikh Nart の姉妹自然公園)のスタッフ4人と、同じくアメリカの画家(過去の Earth watch 者参加)が1人、加わった。



キャンプ！

【宿泊】

キャンプではゲルに宿泊する。食堂となるゲルと、台所のゲルが1つずつあり、あとは宿泊用のゲルである。僕のゲルは、男12～13人で寝起きを共にした。まるで大きな家族、たくさんの兄弟のような感じ。人と人との距離が近くて、すぐに打ち解けることができた。



宿泊していたゲル



台所のゲル

【食事】

朝・夕は、食堂のゲルでみんなで食べる。昼は各自で調査地に簡単なものを持って行く。

モンゴル人のコックが1人いて、その人が中心となって料理する。手が空いているときには、僕も手伝いをした。

・朝・・・パンが中心。チーズやヨーグルトと一緒に。

・昼・・・パンやビスケット。時にはキンパブ(のり巻き)。

・夕・・・米と肉が中心。必ず前菜にサラダがある。

食事はとても美味しく、毎日楽しみであった。30人あまりが一つのゲルに集まる夕飯は、いつも賑やかだった。



食堂にて夕飯を待つ



毎日おいしい夕飯！

【水】

水は湧き水をくんでくる。すぐ近くののだが、かなりの重労働である。わき水には、いつも色々な動物がやって来る。

飲用水は、このわき水を濾過する。まさに生命線。味は少ししょっぱい。今となっては、この湧き水の味が懐かしい。また飲みたい。

シャワーは Sun Shower がある。「こんな便利なものがあるのか!？」と感動した。湧き水を①のような袋に入れて、日中に外に置いておく。すると、強烈な太陽光線で、アツアツになる。②のように高いところに吊して、至福のシャワータイムを満喫する。

洗濯は手洗い。水がもったいないし、土が汚れるので、洗剤は使わなかった。僕は洗濯が好きで、毎日やっていた。手洗い最高。

トイレは、穴を掘った上に西洋式の便座が完備されている。もちろん、屋根も壁もあるので、安心。こんな僻地のキャンプにも、西洋式の文化を持ち込むアメリカ人に脱帽である。

キャンプ生活の中で、水の大切さ・貴重さを再確認した。



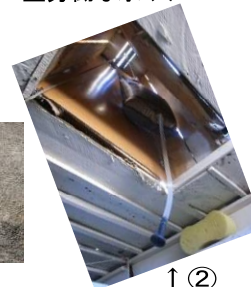
湧き水に集まる牛



重労働な水くみ



Sun Shower ↑ ①



↑ ②

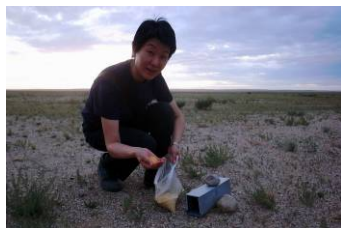


趣味の洗濯



ウエスタンスタイル

調査開始



餌を入れるYukiko

8月2日 17:30、ウランバートルから Ikh Nart に到着。キャンプにいる全員で輪になって自己紹介をする。夕食後、さっそく小型哺乳類の調査に加わった。この時期の Ikh Nart は 21:00 頃まで明るいので、比較的遅くまで調査が可能である。

2つの地域、合計 200 個のトラップの入り口を開け、餌を入れた。餌は粟にピーナッツバターを練り込んだものである。小型哺乳類の大好物らしい。明日の朝、たくさん捕獲されていることを祈り、キャンプに戻る。

調査①【小型哺乳類 Small Mammals】

Ikh Nart には、2 種のアレチネズミ(gerbils)、4 種のトビウサギ(jerboas)、多くの種類のハムスターがいる。これらの小型哺乳類の生息状況と個体数を調べている。この調査を中心となって進めているのが、Ms.S.Buyandelger(通称 Buyana)である(写真①)。物静かで、とても素敵な女性だ。

【調査方法】

ひとつの地域に100個のトラップを仕掛ける。トラップは金属製で、中にえさを入れる。中に入ると入り口が閉まるようになっている(下の写真②)。

捕獲した動物の、種類・雌雄・体長・体重・妊娠の有無を記録し、初めて捕獲されたものにはイヤータグを付けて逃がす。再捕獲されたものから、個体の変化やその寿命を知ることができる。また、捕獲数の中の再捕獲の割合から、その地域の種類別のおおよその個体数と生息状況を導き出すことができる。



①Buyana



②トラップ



ハムスター



トビウサギ



③昆虫のトラップ

これらの小型哺乳類は夜行性だ。そのため、夕方にトラップを仕掛け、早朝に調査する。同時期に2つの地域を調査する。

また、小型哺乳類の餌となる昆虫のトラップをしかけ、生息状況を調べた(写真③)。やや体長が大きくなるモルモットについては、赤外線カメラを仕掛け、その行動を観察した。

8月3日 Small Mammals – Training – Argali

朝 6:30 にキャンプを出発。2つの地域で合計 18 匹のハムスターやトビウサギを捕獲する。ハムスターはとってもかわいい。小学校のうちのクラスでは、今ハムスターが大ブーム。多くの児童が飼っているジャンガリアン・ハムスターも、野生で生息しているのが新鮮だった。ハムスターは大自然の中でたくましく生きている。子どもたちの顔が脳裏に浮かぶ。「この光景をみんなに見てもらいたい！」と強く思った。

朝食後、トレーニング。「GPS」「無線テレメトリー」「植物の調査・計測」の3つについて行う。

「GPS」半草原・半砂漠の Ikh Nart では、目印になるものが少なく、どこも同じ景色に見える。動物の位置を記録するため、目的地にたどりつくため、何よりも迷わずにキャンプに戻るため、非常に重要である。

「無線テレメトリー」すでに発信機を付けている動物が、どちらの方位にいるかを計測するアンテナ。アルガリ、アイベックス、ハリネズミなどの調査で大活躍する道具である。使いこなすには、やや慣れが必要。

「植物の調査・計測」1m 四方のロープを投げて、その中に生えている植物の種類・体長を記録する。



無線テレメタリーを使うOtgoo

昼食後、ついに念願のアルガリの調査へ。モンゴル人リサーチャーの Otgonbayer (通称 Otgoo) とともに、北に向かう。Otgoo は信じられないくらい目がいい(僕の出会ったモンゴル人はみな目がいい)。僕が双眼鏡を使ってもなかなか分からないものを、肉眼で見つけてしまう。驚異的である。彼の熟練した技術もあり、この日は半日で 12 頭のアルガリと、6 頭のアイベックスを観測することができた。

夕飯前に、また昨日同様に小型哺乳類のトラップを準備しに行く。2 地域、200 トラップ。夕飯後、アルガリ研究者の Mr.S.Amgalanbaatar (通称 Amgaa) から、Ikh Nart のアルガリ調査についてのプレゼンテーションがある。早朝から夜まで、本当に内容の濃い充実した 1 日である。

調査②【アルガリ Argali】

このプロジェクトの中心となる調査である。アルガリの個体数は一時期劇的に減少し、絶滅が危ぶまれた。だが、調査と保護の活動の結果、近年アルガリの数は増えてきて、現在 Ikh Nart には 800 頭ほどのアルガリが生息しているとのことである。調査の中心となっているのは、Mr.S.Amgalanbaatar (Amgaa、写真①)。Amgaa は親父ギャグを連発する、とても親しみやすい「お父さん」のような研究者であった。

【調査方法】

すでに発信機をつけたアルガリを、無線テレメタリーを用いて探し、観察する。そして、「生息場所」「群れの数」「群れの中の子どもの数」を記録し、データを収集する。発信機を頼りにひたすら歩いて調査をする、体力勝負の活動である。また毎年 9 月、発情期の前にアルガリを捕獲して、体長を測定し、新たに発信機をつける。この作業はかなりおもしろいもので、アルガリを駆逐ネットに追い込み、捕まえる。



我々に気がつくアルガリ



遠くから観察する



① Amgaa



逃げるアルガリの群れ。子どももたくさんいる。

アルガリのオスは、大きなもので体重 230kg にも達する。アルガリは用心深く、視力もとてもいい。だから、なかなか近づいて観察することができない。たまたま比較的近い距離で遭遇することができても、すぐに走って逃げてしまう。そのため、カメラを構えるのが間に合わず、写真を撮ることが難しかった。

8 月 4 日 Hedgehogs – Argali

昨夜から急に天候が悪化した。夜中に雨が降り、風も出る。びっくりするほど気温も低い。今日は朝から Batdorj (通称 Tom) とともに、ハリネズミの調査に出かけた。だが、降雨で無線テレメタリーが使えず、調査は中止。キャンプに戻る。

午後、雨は止んだので、再びハリネズミ調査に出かける。気温は 13°C。東京の夏では考えられない気温だ。風も非常に強く、体感温度は東京の真冬なみ。モンゴルの自然環境の壮大さを痛感する。

無線を頼りにハリネズミを発見。ハリネズミは夜行性なので、昼間は巣穴の中で眠っている。Tom はとても優

しい男だ。ハリネズミの調査の仕方にも、愛情を感じる。巣穴からハリネズミを引っ張り出すときの、Tom の表情が忘れられない(写真右)。

ハリネズミを 1 匹調査したあと、そのまま Tom とともにアルガリの調査へと移った。途中、アルガリの子どもの死骸を発見する。死因ははっきり分らないが、何らかの理由で足を骨折してしまい、動けなくなってしまったようである。動物たちが生きていくことの困難さを、目の当たりにする。



この表情が、忘れられない

調査③【ハリネズミ Hedgehogs】

Ikh Nart には 2 種のハリネズミが生息している。Long-eared と Daurian だ。とてもかわいらしい動物である。調査を進めているのは、Mr.S.Batdoj (Tom、写真①)。ハリネズミは夜行性で、一晩に 4km も移動するという。当然、夜間の調査も多くなる。Tom もすっかり夜行性だ。



①Tom



②3匹目

【調査方法】

現在の調査地域は 30 平方 km の範囲。15 匹のハリネズミを確認しており、そのうち 2 匹に発信機をつけている。無線テレメタリーを使って、その行動を調査する。

またトラップをしかけ、新たな個体の確認と計測をする。そのデータから、地域の個体数と生息状況を調査している。滞在中に 3 匹目の発信機をつけた(写真②)。



Daurian Hedgehog

調査④【クロハゲワシ Vultures】

Ikh Nart のクロハゲワシは、だいたい 3 月頃に卵を産み、5 月下旬に雛が誕生する。巣は岩や木の上に作る。若鳥は 9 月に巣立つ。巣立つ直前の雛は、親と変わらない大きさに育つ。平均で、体重 9kg、両翼を広げると 315cm にもなる。

調査は Denver Zoo の人たちが進める。中でも中心になっているのは獣医の Dr.David Kenny (通称 Dave) である(写真①)。いつも冗談ばかりを言い合って、とても楽しい雰囲気の中で調査を行っている。

【調査方法】

大人になったクロハゲワシを捕獲・計測することは困難である。巣立つ直前の雛を、親がいない隙に捕まえる。体長、体重の計測(写真②)。血液と羽毛の採取。翼へのタグの取り付け(写真③)、足首へ足環の取り付けを行う(写真④)。



調査の様子



①Dave



体長の計測



翼にタグを取り付ける



大きな足。足環を付ける。



親が帰ってくることも…

一度、雛の計測中に親鳥が戻ってきた。「クロハゲワシは人間を襲わない」と聞いていたが、かなりドキドキした。親鳥は我々を威嚇するように近くを旋回していたが、攻撃してくることはなかった。

8月5日 Vultures – Ibex

朝 6:30、Denver Zoo の人たちのクロハゲワシの調査に同行する。今日は5箇所の巣を調査する。残念ながら1つの巣の雛は死んでしまっていた。「何らかの理由で親が戻って来られなくなったため」らしい。他の4羽はとても元気に育っていた。

最初に計測して雛は、なんとお腹の下に子羊の頭蓋骨を抱えていた(写真右)。さすが肉食のクロハゲワシである。

計測するときには、大人数人がかりで押さえこむ。まだ飛ぶことができない雛とはいえ、身体の大きさは親鳥と変わらない。力も相当強くなっている。僕も毎回、雛を傷つけてしまわないように細心の注意を払いながら、暴れる雛を押さえこんだ。

4羽の雛を計測して思ったこと。それは当たり前のことであるが、1羽1羽それぞれ個性があって、性格が全く違うということである。最初は激しく抵抗するが、諦めたのか急におとなしくなったもの。終始とにかく激しく抵抗して暴れていたもの。なんだかボーっとして、されるがままに身を任せていたもの。ずっとおとなしくしていたが、翼の計測になったとたん、今までのどの雛よりも激しく暴れたもの。みんなそれぞれに全然違う。そのことが嬉しくて、涙が出そうだった。生物が生きているということ。それは数字やデータにすり替えることのできない、重みのある事実である。その本質的なところを垣間見ることができたように思う。

クロハゲワシの調査は順調に終わり、昼過ぎにはキャンプに戻った。午後は Dave と2人でアイベックスの観察に出かける。群れに遭遇すると、「無心になるんだ。邪念を捨てれば近づくことができる。」と言う。偶然なのか、それとも精神論が効いたのか、この日はびっくりするくらい群れに近づいて観察することができた。

夜は Denver Zoo の研究者である Travis から、クロハゲワシのプレゼンテーションがあった。



お腹の下から子羊の頭蓋骨が...

調査⑤【アイベックス Ibex】

アイベックスは野生の山羊である。アルガリの調査と並行して進められている。アルガリとアイベックスがどのように棲み分けをし、また共存しているかを調べる。アルガリは一般的に陰しい山よりも、ゆるやかな山や丘を好むという。一方アイベックスは、陰しく高い岩場に適応して生活している。アイベックスのオスは、大きいもので体重 150kg になる。

【調査方法】

調査方法は、アルガリとほぼ同様である。無線テレメトリーを用いて、発信機をつけたアイベックスを探し、観察する。また、9月には、アルガリと同じく、大規模な捕獲作業が行われ、新たに発信機を取り付ける。



岩場の上にいるアイベックスの群れ



無線テレメトリーで搜索



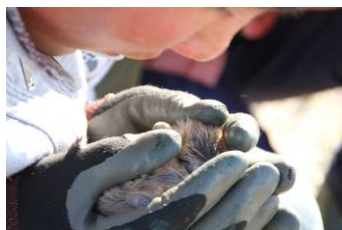
隠れて観察する



立派なツノ

アルガリとアイベックスを比較すると、やはりアルガリの方が密猟されることが圧倒的に多いそうである。アルガリの肉はとても美味しいらしい。アイベックスも食べるらしいが、そんなに好まれない。また、アルガリのツノは、漢方薬になったり、記念品になったりと、非常に価値がある。だが、アイベックスのツノはその辺に投げ捨てられるという。

8月6日 Small Mammals – Plants



凍えるハムスターを温める

朝食を食べて、9:30に植物の調査に出かける。今日は10箇所の地点で、1m四方の区画に生える植物のデータを収集する。今まで動物たちばかりに目がいって、植物についてはあまり気にしていなかった。が、いざ植物の調査を始めてみると、多くの種類のものがあることに気付かされ、とても面白かった。

朝 6:30、小型哺乳類の調査へ。トラップの中のハムスターたちの何匹かが、昨晚の寒さのために凍えて動かなくなっていた。今年の夏は異常気象でひどく寒いらしい。今までに8月の調査で、このようなことはなかったという。

みんな、凍えている動物を見つけると、手で温め息を吹きかけた。少し元気になると、懷に入れて作業を続けた。調査に携わる者の、動物に対する愛情をひしひしと感じた。調査の犠牲となって死んでしまうものは、1匹もいなかった。

調査⑥【植物 Plants】

Ikh Nart の植物について調査する。半砂漠の環境とはいえ、足下に目を向けてみると多様な植物が生えている。アルガリやアイベックスも草を食べて生きている。植生を調べるのはとても重要だ。調査を進めているのは Jimsee(写真①)である。

【調査方法】

特定の地点で、ランダムに区切った 1m 四方の区画の植生について調べる。その区画に生えている植物の種類、大きさを測定する。1日の歩行距離も長く、根気のいる調査であった。



調査の様子



Ikh Nartの植物たち



①Jimsee

8月7日 BBQ



夕飯になる山羊

夕方からモンゴリアン・バーベキューがある。午前中、そのための山羊の解体を見せてもらう。鳴き声一つ出させない技術は、まさに職人技であった。と畜の方法は日本と異なり、血を一滴も流さない。仰向けにして、全て肉に吸収させる。文化の違いだ。

僕のクラスでは昨年度、「と畜」について時間をかけて学習した。モンゴルの「と畜」を目の当たりにできたことは、子どもたちへの大きなお土産となった。ぜひ授業の中で扱いたい。

昼食は、解体したての内臓を、みんなで食べた。美味しい！

午後は遊牧民のゲルへ。ヨーグルトやチーズをご馳走になる。子どもたちはヨーヨーのプレゼントに大喜び。

その後、キャンプに戻りBBQ。山羊一頭でかなりのボリューム。今日は一日食べ過ぎた。



遊牧民のゲルにて



ヨーグルトをいただく



BBQ



Sing a song!

BBQ の後、みなで一つのゲルに集まり、歌を歌った。モンゴル人は歌うのが大好きである。ゲルの中でも、移動中の車でも、いつもみんなで歌を歌っている。長い冬、狭いゲルの中の過ごし方を、よく知っているのだろう。

満足がいくまで歌うと、今度はダンスだ。Ikh Nart の区域外まで車を走らせ、ディスコへと向かう。小さな子どもからお年寄りまで、老若男女が集う不思議な空間だった。キャンプに戻ったのは 2:30 を過ぎていた。

8 月 8 日 Argali – Small Mammals

10:00、Otgoo と共にアルガリの調査に。午前中は曇っていたが、午後晴れる。

Ikh Nart の大地には、そこら中に動物の骨とウンコが落ちている。僕の感覚では、ウンコを踏むことには抵抗がある。いつもよけて歩いていた。だが、モンゴル人は気にしない。平気で上を踏んでいく。踏むどころか、休憩中もウンコの上に座ってしまう。僕も細かいことは気にしない方の人間なのだが、この大胆さには完敗である。

確かに、乾燥した大地で、草食動物のウンコは全然臭くない。土と同じである。この日、昼食を取ったあとに、軽く昼寝をした。気がつけば、僕もウンコの上で寝ていた。少し人間として大きくなった気がする。

18:00、小型哺乳類のトラップの準備に出かける。また、昆虫のトラップの調査と、モルモットのための赤外線カメラのセッティングを行う。天気もよく、夕焼けがとても綺麗。



落ちていたアルガリの骨

8 月 9 日 Ibex – Small Mammals



岩陰に身を隠して観察

朝食後、Myagmarjav (通称 Miga) と Buyana と共に Ibex の調査へ。Miga は身長 187cm、英語ペラペラで、20 歳で大学 4 年生という、エリート学生。

アルガリもアイベックスも、主に朝・夕に採食する。夏の日中は岩陰で過ごす。この日は岩陰で休んでいるアイベックスを、身を隠しながらじっくりと観察した。そして相手の様子を見ながら、少しずつ距離を縮めていく。

一度、偶然にアイベックスの群れと急接近する。岩場を歩いていて、ふと上を見上げると、すぐそこにアイベックスがいる。向こうもすぐにこちらに気付いて、逃げる。Myaga と一緒に走って岩場を駆け上がり、群れを追いかける。が、あっという間に遠くの岩山まで逃げられてしまった。さすがに速い。

17:30、今日も小型哺乳類のトラップの準備、昆虫の調査に出かける。昆虫の調査は、トラップにかかっている虫の数をひたすら数える。多いときには、1 つのトラップに 150 匹くらい入っていて、根気がいる作業だ。

8 月 10 日 Hedgehogs

朝食後、Tom と共にハリネズミの調査へ。まずは無線テレメタリーを使って、発信機をつけた個体の居場所を確認する。Tom は今晚、このハリネズミが活動するのを一晩中観察するという。一体、いつ寝るのだろうか？

その後、仕掛けてある 7 つのトラップを確認しに行く。トラップは、踏むとパチンと閉まる、いかにも罠らしい罠である(右写真)。ハリネズミが好きなオイルの香りでおびき寄せている。このトラップの挟まるところは柔らかいゴムでできており、ハリネズミが怪我をすることはないそうだ。実際に指を挟んでみても、痛くない。この日は残念ながら、1 匹も捕獲することはできなかった。

Tom は 1 匹 1 匹のハリネズミに、愛情を持って接していることがひしひしと伝わってくる。個のデータを収集し、客観的に種全体を知ることが、調査の目的

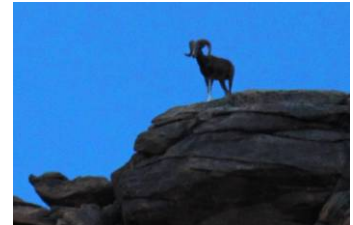


ハリネズミのトラップ

である。だが、Tom を見ていると、それ以前の、個体 1 つ 1 つと関わることの大切さを実感する。Tom は発信機を付けたハリネズミを、毎日のように追いかけて観察する。だが、調査がいつも順調に進むとは限らない。あるときは、ゴールデン・イーグルの巣で発信機を見つけたことがあるという。また去年の冬には、地下 110cm のところで死んでいるのを見つけたという。異常気象で例年になく寒く、いくら地中深くにもぐっても寒さを凌げなかったらしい。そのような話を、Tom は本当に悲しそうに話す。まるで家族を失ったかのような話ぶりだ。研究者のこのような姿勢からこそ学びたい。彼らは、対象が温かい血の通った生命であることを、誰よりもよく知っている。

黄昏時、キャンプのすぐ裏の岩山にアルガリの群れが現れる。アルガリは長い時間、岩山の上から我々のことを見下ろしていた。いつも探し求めているアルガリが、我々の生活のすぐ横にいる。何とも不思議な感覚だった。

夕飯後、Tom からハリネズミについてのプレゼンテーションがある。まだ 24 歳の若き研究者の発表を、みな温かい目で見守っていた。



キャンプを見下ろすアルガリ

キャンプの生活②



寛いだ時間が流れる

【余暇】

11 日間のキャンプ生活。朝から晩まで様々な調査に参加し、充実した毎日を送った。そのような毎日の忙しい時間と時間の間に、とても寛いだ時間があつた。

調査と調査の合間の時間。くたくたになって帰ってきて、夕飯を待っている時間。一日のスケジュールを全て終えて、寝袋に入るまでの時間。大自然の中に、ゆったりとした時間が流れていた。読書をする人。お茶を飲む人。うたた寝をする人。バスケットボールをする人。仲間とお喋りをする人。みんなそれぞれ、思い思いのことをして過ごす。このような、贅沢で濃密な時間も、印象的であつた。

【Let's go to Camp !】

「Camp」という言葉は、僕の中で特別な意味を持つようになった。歩き疲れて、一日の調査を終えようとするとき、みんな「Let's go to Camp !」と言う。「Camp」とは、すでに「我が家」と同義語だ。仲間が待っている、安らげる場所。僕たちが帰るべき場所。「Camp」とは、僕にとってとても大切な、ぬくもりを伴う言葉になっていた。



夕日の中のCamp。僕たちの帰る場所。

8 月 10～11 日 Small Mammals (テント泊)

11 日未明に、夜行性である小型哺乳類を観察するため、前日から調査地に赴いた。モンゴル人学生の Munkhchuluun(通称 Muugii)と Miga と共に、大草原でテント泊。意味もなくワクワクして盛り上がった。

夜は男 3 人で、様々なことを語り合った。恋人のこと。家族のこと。将来の夢。2 人とも、びっくりするくらい純粋で誠実な男である。

深夜、ふと目が覚める。テントの横に何かの気配。草を踏む音。何かの野生動物だろう。深い静寂の中で、動物たちと隣り合わせで生きていることの豊かさを思う。

夜明け前。岩陰から動物たちを観察する。残念ながら、この日はほとんど小型哺乳類を見つけることはできなかった。迎えの車が来るまで、テントにもどり至福の二度寝をする。



Muugii(左)、Miga(中)とテント泊

8月11日 Anza-Borrego Desert State Park

9:30 にテントから戻る。急いで朝食を食べ、10:00 から Amgaa とカリフォルニアの Anza-Borrego Desert State Park (Ikh Nart の姉妹自然公園) のスタッフ 4 人と共に出かける。Ikh Nart はどこも同じような景色で、目印となるものが少ない。そこで「Ikh Nart のあちこちに、ランドマークとなる標識を立てる」という活動を行っていた。



ランドマークの標識

夕飯後、Buyana による小型哺乳類のプレゼンテーションがあった。しかし、そのとき僕はモンゴル人学生たちとバスケットに熱中。気が付いたときにはプレゼンはほとんど終わっていた。本当にもったいないことをした。このキャンプ中、最大の失敗である。

8月12日 Ikh Nart 最終日

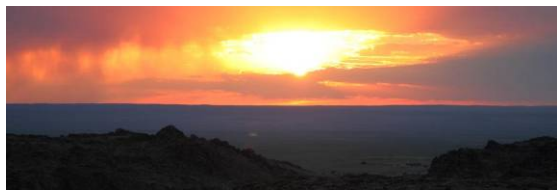


みんなで泉を掘る

車で少し走ったところで、新しい泉が見つかった。午前中、みんなで泉を掘りに行った。モンゴル人のチームワークはとて素晴らしい。自然と役割分担をして、2～3 時間で水が湧き出した。僕も汗だくになって一緒に作業をした。

午後キャンプに戻り、昼食をとる。いよいよ Ikh Nart にいられる時間も、残りわずかになってきた。荷物をまとめたり、片付けをしたりする。

19:30、Ikh Nart を後にする。「ここに再び戻って来ることはあるのだろうか？」Shivee Gobi 駅に向かう車の中で、何度も自分の胸に問うた。駅で列車を待ち、1:00 過ぎにウランバートル行きの寝台列車に乗りこむ。Ikh Nart がどんどん遠くなる。



仲間との別れ。Ikh Nart との別れ。



別れを惜しみながら、みんなでパチリ。

8月13日 Dinner Party

8:00、ウランバートル駅に到着。Zaya Hostel へ。Miga が Earth Watch のメンバーのガイドをしてくれて、ウランバートルの市内観光をする。

19:30 から最後の夕食会。キャンプにいたほとんどの人が、モンゴリアン・バーベキューのレストランに集合した。Ikh Nart を出発するときには感傷的になってしまったが、最後の食事は仲間と大笑いしながら楽しんだ。やっぱり別れは笑顔が一番。



Earth Watch のメンバー

8月14～24日 帰国

プロジェクトが終わり、帰国する前にモンゴル人学生 Miga と共にモンゴル国内を旅行した。ハラホリンでバスケットをして左足首の靭帯を損傷するアクシデントがあったが、24 日にギブスと松葉杖で無事に帰国する。

【教育現場への還元】

このモンゴルでの夢のような体験を、教育現場に最大限に還元していく。今、僕の目の前にいる子どもたちへ。そして、これからの教員人生の中で出会う全ての子どもたちへ。僕の体験を伝えていきたい。

小学校の現場で、子どもたちに何を伝えていくのか？モンゴルの野生生物の現状。研究者の姿勢と、具体的な調査手法。世界的な規模の環境問題。事実を目の当たりにした当事者として、子どもたちの心を惹きつける授業を組み立てることが可能であろう。だが、伝えたいのは、知識ではない。ひとつのテレビ番組でも見るように、自身の生活を離れたところで学習するのであれば、最も本質的なところが抜け落ちてしまう。

①自分が生きていることの中で、捉える。

環境問題とは、教室の机の上ではなく、僕たちの生活に密着したところにあるのだろう。育っていく自分。校庭の桜。通学路の樹木。金木犀の香り。落ち葉の下で見つけたダンゴ虫。大好きな給食のメニュー。僕たちの生活のありとあらゆるものが、この地球規模の環境問題と密接に結びついている。自分の目で見て、指で触ってみる。心で感じて、頭で考える。そのような活動こそ、子どもたちの力となっていくだろう。私たちの生きる環境は、地球環境そのものである。無理矢理に地球規模の問題に結びつけて考える必要はない。身近な動植物に耳を澄まし、目をこらすことを大切にしたい。それこそが地球環境なのだから。モンゴルの大自然での活動の中から学んだこと。それは、環境を「自分が生きていること」の中で捉えること。環境問題をうすっぺらい知識で終わらせないように、自分の足下をしっかりと見ながら、子どもたちと活動していきたい。

②僕たちが地球を変える。

未来は僕たちの手で作っていく。地球規模の環境問題は、誰かが食い止めてくれるのではない。「自分一人がやっても仕方ない」「誰かがやってくれる」と考えていたら、何も解決できない。一人ひとりが立ち上がらなければならない。一人ひとりの小さな力が集まって、大きなうねりとなり、地球の未来を変えるのだ。

融け出す南極の氷を、急速に砂漠へと変わっていく大地を、急に何とかする力を僕たちは持たない。しかし、自分が生きていることの中で環境を捉え、そこでできることをやればいい。時には、遠くモンゴルで絶滅の危機に瀕する動物に思いを馳せるのもよい。だが、最も大切なことは、自分の生活の中でできることである。世界中のいたるところで、一人でも多くの人が、自分にできることをやることである。その力が集まれば、地球環境だって変えられる。自分の生活の中で「僕たちが地球を変える」と、胸を張って行動できる子どもを育てたい。そのような主体的に生きる子どもを育てることが、教員の仕事であろう。

終わりに

調査の最終日。僕は Ikh Nart を後にするときに、「ここに再び戻って来ることはあるのだろうか？」と何度も自問した。またいつでも、時間さえあれば Ikh Nart を訪問することはできよう。Ikh Nart の大自然は素晴らしい。だが、今回の経験が忘れがたいものであるのは、決して地理的な場所だけによるものではない。楽しい仲間。大家族のようなキャンプ生活。何事も心配せずに調査に没頭できる環境。それらは全てアースウォッチ・ジャパンと花王株式会社が用意してくれたものである。再びこのような体験をすることができるとしたら、それは広い世界のどこかの Earth Watch の活動に参加したときかもしれない。

今回、このような素晴らしい機会を与えてくださった、花王株式会社とアースウォッチ・ジャパンのみなさまに、心から感謝いたします。また、モンゴルで出会うことのできた全ての仲間と動物たち、色々と助けてくれた由紀子さん、長期の休暇で迷惑をかけてしまった堤小学校の先生方、そして協力をしていただいた全ての方々に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。